

ストーンヘンジ再訪

昨年10月、ロンドン滞在中の一日を利用して、イギリス、いや世界を代表するといつてよい先史時代の遺跡、ウィルトシャー州のストーンヘンジを約20年ぶりに再訪した。ロンドンから鉄道でちょうど1時間半、ソールズベリー駅に降り立つと、赤いレンガ造りの小さな駅舎の前に、ストーンヘンジ・ツアーの二階建てバスが乗客を待ち構えている。観光客に混ざってバスに乗り、しばらくすると町を離れ、周囲はいかにもイングランドらしい田園風景が広がっている。やがて到着したバス停の道を挟んだ反対側に立っているのが、2013年にオープンした真新しいビジター・センターで、ガラス張りの現代的なデザインの建築が、違和感なく周囲の景観に溶け込んでいる。年間100万人以上の見学者に対応するため、大きな駐車場が整備され、施設内にはグッズの販売や飲食ができるスペースももちろん設けられている。

ストーンヘンジの中核部は、イングリッシュ・ヘリテージの管理となっていて、現地を訪れるためには、チケットを購入し、ビジターセンターに入館する必要がある。施設内には、出土資料のささやかな展示があるほか、見学者の動線に沿って、大きな表示のパネルが配置され、簡潔にして要を得た文章によって、ストーンヘンジが、太陽の運動に沿って立石が配列された先史時代の神殿であること、当時の技術の粋を集めた作品であること、先史時代の複雑なランドスケープの一部であることが印象づけられる。ストーンヘンジが建築された目的は今の我々には失われていて、その意味については絶えず論争があることも最後に付け加えられている。

独特のランドスケープ

見学者は、ビジターセンターを通り抜け、反対側の出口から、約3km離れたストーンヘンジの現地へと向かう。かつてストーンヘンジの真横を通過していた幹線道路のA344号線が閉鎖され、現在は、舗装されたその路面を利用して現地とのシャトルバスが運行されているのだ。多くの人がバスを利用するようだが、歩いて現地に向かうこともできる。ナショナル・トラストが管理する近辺の草原地帯には、遊歩道が整備され、独特のランドスケープを楽しみながら、ゆっくりと散策できるようになっている。小一時間の道のりだが、私は後者を選択した。

人もまばらな遊歩道を少し進むと、目の前に現れるのが「ストーンヘンジ・カーサス」で、二列の土手(幅100m)が2.7kmにわたってまっすぐに伸びているという。18世紀の古代学者ウィリアム・スタックレーが最初に注目して命名したこの構築物は、しかし、説明がなければ現地では気づかないほど雄大で、現地に設置された解説板の空中写真を見て、初めてランドスケープの全体像に驚かされる。その建設年代は紀元前3600～3300年頃に遡り、ストーンヘンジ以前から、この地域が儀礼的な場所であったことを示していて、儀礼的な行列を行ったりした可能性があるのだという。

草原の遠くには羊が群れ、その手前に点々と見える小さな塚の高まりは、「カーサス」よりも1,000年以上新しい青銅器時代の墳丘墓群だ。遊歩道はやがてバスの路線と合流し、大勢の



観光客で賑わうストーンヘンジ (筆者撮影)

見学者で賑わうストーンヘンジへと到着する。以前は立石のところまで立ち入ることができたのだが、現在は、歩道に沿って、周囲から遠巻きに眺めるのみになっている。立石群を直径約110mの円形に囲む溝は、1920年代に行われたコーネル・ウィリアム・ホークレーの発掘調査により、紀元前3,000年頃に掘られたストーンヘンジで最初の構築物だということが明らかになっている。ストーンヘンジが次に大きな変化を受けるのは、紀元前2500年頃で、円形溝の内側に、砂岩の大きな石材とブルー・ストーンの小ぶりの石材が大量に持ち込まれて、モニュメントが構築される。しかし、多大な労力を費やして、壮大なモニュメントを建設した目的は明らかではなく、推察されるのは何らかの宗教的な理由があったであろうということだけだ。

ストーンヘンジの謎

ストーンヘンジは、紀元前1600年頃までは造営活動が継続するが、その後、いつまで使用されたのかについてはよくわからない。ローマの時代には、一部の石材が持ち去られたり、ローマ式の祭壇として利用されたりした可能性があるらしい。中世になると、ストーンヘンジの意味は全く忘れ去られ、12世紀の歴史書では、サクソン人とブリトン人の戦闘を記念して、魔女マーリンによって魔術的に築造されたという考えが提示される。この考えは、16世紀まで広く認められた考えとなる。17世紀には、ストーンヘンジの築造者について、ブリトン人、サクソン人、ローマ人、デーン人、フェニキア人など、諸説が現れる。18世紀には、古代学者のウィリアム・スタックレーが、ローマ以前のブリテン島の住民たちが築造した神殿説を唱え、ローマ人が記録した古代の神官ドルイドたちがその司祭者だったと考えた。ロマン主義的な風潮のなか、芸術家たちは、ドルイドたちが住む荒涼とした世界を背景に、ストーンヘンジを絵画に描いた。

19世紀になると、現地を訪れた考古学者ウィリアム・カニントンが、発達しつつあった科学的な手法での調査を試みるが、ストーンヘンジは謎にとどまった。1883年には、国家的に保護されるべきモニュメントのリストに加えられるが、実質的な保護がなされることはなく、1900年12月31日、ついに石材の崩落事件が起きる(続く)。